

# Jazz Interview vol.34

## ブルース・フィーリング溢れる名ジャズ・ギタリスト ケニー・バレル【Kenny Burrell】

今年の7月31日で82歳を迎えたケニー・バレル。名盤『ミッドナイト・ブルー』を愛聴しているファンも多いと思うが、長いキャリアの中で数多くの名演・名盤を残している現役バリバリの名ジャズ・ギタリストだ。

7月には2012年11月ハリウッドにあるジャズ・クラブ「Catalina's」で行なわれたファンのリクエスト・ナンバーを演奏したライブを収録したアルバム『Special Requests (And Other Favorites)』をリリースしたばかりで、哀愁とブルース・フィーリング溢れるジャズ・ギターは衰えるどころか、益々渋さを増している。

本誌でも念願だったジャズ史に輝く名ジャズ・ギタリスト、ケニー・バレルのインタビューが遂に実現しました！

【2013年8月 取材・文：加瀬正之】

【取材協力：HighNote Records】



写真提供：HighNote Records

★7月にリリースされたばかりのニュー・アルバム『Special Requests (And Other Favorites)』はギターだけでなく、あなたのヴォーカルも聴ける素晴らしいアルバムですね。日本のファンにこのアルバムについてメッセージを頂けますか？

みんなも想像できると思うけど、たくさんのコンサートで演奏している分だけ、たくさんのリクエストをもらうんだ。ここ数年にかけてクラブやコンサート・ホールに足を運んでくれた私のファンからもらっていたリクエスト曲の結果がこのレコーディングなんだよ。彼らのリクエストに応じてアルバムを作るというのはとても素晴らしいアイデアだと思ったし、幾つかの曲は私があまり興味を示さず避けていた曲や、これまでにレコーディングした経験がなかった曲だったりしたけれど、結果的に彼らのリクエストは私自身にも好みの曲だったんだ。

★あなたがミュージシャンの道を歩む過程で、ギターを手にすることになった経緯を教えてくださいませんか？

ギターは実際には私にとって2番目の選択肢だったんだよ。私がとても若い時に兄に張り合おうとギターのコードを幾つか習ったこともあったんだけどね。ただ、10代前半の頃にテナー・サクスを聴いて、サクス奏者になりたいと思ったんだ。君たちも知っているように、当時はコールマン・ホーキンスとレスター・ヤングがブームだったんだよ。だけど、我が家は裕福ではなかったし、サクスを買うような余裕はなかったから、質屋で10ドルのギターを買ったんだ。それからチャーリー・クリスチャンを聴いて、「やっぱりギターも悪くないかも！」って言ったのさ。私にとってギターから「チャック、チャック、チャック」というリズム・セクションの役割を引き出したり、ギターをサクスやトランペットと一緒にフロント・ラインに持ってくることに開眼させてくれたのはチャーリー・クリスチャンのエレクトリック・ギターだったんだ。

★幼い頃はどんな音楽を聴いていたのですか？ また、お気に入りのミュージシャンは誰でしたか？

幼い頃はあらゆるタイプのポピュラー・ミュージックを聴いていたね。ジャズはその中のほんの一部だったんだ。君たちが心に留めておかねばならないことは、40年代や50年代のラジオというのは、君たちが聴いているようなひとつのジャンルの音楽に特化した専門の局が存在する現在のラジオとは異なるということだね。今ではジャズやブルース、ヒップホップだけを流すラジオ局が存在するだろう。でも、私が幼い頃のラジオ局は幅広いあらゆるジャンルの音楽を流していたんだよ。私はコールマン・ホーキンスとレスター・ヤングを楽しんでいたけど、その他のたくさんの音楽も“ポップ・ミュージック”として考えられていたんだ。私がひとつ言えることは、我々はみんなその当時のバンド・リーダーとしてデューク・エリントンに夢中だったってことさ。

★1961年にリリースされた『ウィーバー・オブ・ドリームス』はあなたのヴォーカルが聴けるアルバムとして知られていますが、歌はいつから歌い始めたのですか？ また、その頃憧れていたヴォーカリストは誰ですか？

歌を歌い始めたのは私の故郷デトロイトにいた10代の頃だね。私が演奏する曲の歌詞がいつも気になっていたから、歌を歌い始めたことは全く自然なことだったよ。青年時代には家の中でもたくさんの歌声に囲まれて育った。私の母は教会のコーラス隊で歌っていたし、父も私の兄弟が歌っていたように歌っていたんだよ。だから、幼い頃から歌を歌うことに抵抗を感じることはなかったのさ。誰でも一度楽器を演奏し始めると、練習してマスターするために自分の時間をたくさん費やさなければならぬよね。お気に入りのヴォーカリストを一人挙げることは難しいけど、10代の頃に好きだったのはナット・キング・コールやエラ・フィッツジェラルド、ビリー・

エクスタイン等、彼らのような歌手たちだったね。

★現在のアメリカのジャズ・シーンについてどのように思われますか？

ジャズは実際にアメリカのあらゆるところに存在しているよ。それはまるで40年代や50年代の頃の状態のようにね。小さなレストランやカクテル・ラウンジ、コーヒー・ショップ、大きなオフィスビルの中庭でさえ演奏しているたくさんの小編成のジャズ・グループを見ると、アメリカに生の音楽を聴くという機会が戻って来ていることを実感するんだ。私が講師を務めているUCLAでも、今まで以上にたくさんの生徒がいるし、彼らはみんな芸術の分野で優れた能力や才能、それに興味も持っているよ。

★日本に関してどのようなイメージを持っていますか？ また、来日の予定はありますか？

日本の観客は素晴らしいし、私の音楽をサポートしてくれることやごく一般にジャズに関する深い知識をもっていることに本当に感謝している。私が次に日本を訪れる日がいつになるのかわからないけど、そのような機会があれば喜んで戻りたいね。

★日本の音楽やミュージシャン、日本の楽器などから影響を受けたことはありますか？

直接的にはないかもしれないけど、恐らく間接的にはあるかな。さっきも言ったように、私はあらゆるジャンルの音楽を聴いていて、確かに何からの影響、知らない間に影響を受けていることはあるだろうね。日本の音楽の中でも、伝統的な日本の音楽は特にスケールや音色がとてもユニークで、私の演奏や作曲において、なぜ影響を受けなかったのが全く信じ難いことだね。

★日本の多くのあなたのファンは今も1963年にリリースされたアルバム『ミッドナイト・ブルー』を愛聴していますが、このアルバムはあなたにとってどんなアルバムですか？

『ミッドナイト・ブルー』は、全体のコンセプトが音を記録する前に心の中で具現化してしまうという珍しい出来事のひとつだったんだ。私はアルバムの全体像や雰囲気を感じたから、“ブルース”モードで出来た幾つかのオリジナルの楽曲をまとめ始めたんだよ。「ジー・ベイビー・エイント・アイ・グット・トゥー・ユー」以外は全て私のオリジナルで、私が欲しかったサウンド、使いたかったハーモニーがはっきりと分かったんだ。それにレイ・バレットとスタンリー・タレンタインにレコーディングに参加してくれるように頼むことになるであろうことさえ分かったんだ。本当にたくさんのファンがこのアルバムについて私に尋ねてくれることから見て、私の直感は正しかったようだね。ブルーノート・レコードの創設者のひとりであるアルフレッド・ライオンのお気に入りのレコードだったとも聞いたことがあるよ。

★次の3人のギタリストについてコメントを頂けますか？



写真提供：HighNote Records

《ウェス・モンゴメリー》

ウェスは楽器で驚くようなことを成し遂げた本当に偉大すぎるほど偉大なギタリストだね。彼のことを私の友達と呼ぶことができたことも本当にラッキーなことだったよ。彼は本物の天才だったし、もし今も彼が存在していたら、現在のジャズ・ギターは全くサウンドが異なるものになっていただろうね。

《T・ポーン・ウォーカー》

T・ポーン・ウォーカーに会えたことは本当に幸運だった。彼はブルースとジャズとのかけ橋のような存在だったんだ。ジャズとブルースの2つのテクニクは、ギターに対する2つの全く異なるアプローチの上に成り立つと考えられていたが、2つのスタイルの融合を可能にしたのがT・ポーンだったんだ。

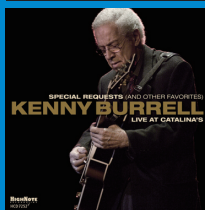
《ジミ・ヘンドリックス》

ジミ・ヘンドリックスと会う機会はなかったけれど、彼が私のプレイを楽しんでくれていたという記事を読んだことがあるんだ。彼があるレコードでケニー・バレルのサウンドっぽいものに近づけようと試みていたと語っていたね。ジミは本当にギター・テクニクを自由に解放したし、彼の驚くような無限の創造性はギターという楽器をほとんどの人が想像できないような次元に持って行ったと言えるよね。

★最後にあなたにとってギターとは何ですか？

その答えは簡単さ。“ギター”とは私の人生そのものだよ。

### ケニー・バレルの最新ライブ・アルバム！



Special Requests  
(And Other Favorites)

Kenny Burrell

HighNote Records : HCD-7252  
(Import CD)

2013年7月29日発売

【\* P11 にレビュー掲載！】